

## 乳母車に乗りたい！

—グリーンランド交通事情—

岡田 久美子

短い夜はとうに明けて、フィヨルドの奥には濃い霧がたちこめている。昨日、夕陽に美しく照り映えていた大小の氷山も、乳白色の霧の中。

国際線の飛行場からヘリコプターと船を乗り継いで辿り着いた、グリーンランド南部の小さな町、カカルトークの静かな朝である。

穏やかな光に誘われて、食事前の散歩に出てみる。この町に一軒だけの小さなホテルの前から、港に通ずる緩やかにカーブした道は、整った舗装道路。しかし裏に廻ると、背後の崖には木製の長い長い梯子状の階段が設けられている。これは家々が折り重なるように上下に密集して建てられている為で、この階段が最短距離を結ぶ通路として、大いに役立っているように見受けられる。濃いオリーブグリーンや、鮮やかなアースレッドのペンキを厚く塗った木造の小さな家は、窓枠に必ず白の縁取りが施され、まるで玩具のよう。こんな可愛らしい造りで、一体イヌイットの人達は、冬の厳しい寒さが防げるのだろうか。

7月末の此の地は、嬉しいことに高山植物が精一杯に咲き競う。家々の下の斜面は明るい黄色のキンポウゲで埋められ、ところどころに真紅のワイルドポピーや、青白いトナカイ苔が混じるのも美しい。湿地には純白のワタスゲが群生し、ベルベットのように艶のある毬状の毛が一斉に風に揺れる様は、幻想的の一語に尽きる。

その湿地帯の一隅の、陽だまりになっている崖に寄り掛かって、女の子がパンを齧っている。こんなところで朝ご飯なのかな？ 傍らには立派な乳母車。日本で幅を利かせている、折り畳み式のベギーバギーなどというチャチな代物ではなく、堂々とした車輪の上に、大型のボディが載ったもの。小さな弟が、その中でつぶらな目を睜っている。

此の地に限らず、アイスランドや他の北欧諸国でも、街中と郊外とを問わず、豪華な乳母車を多く見かけた。かなり大きな子供までもが乗っていたし、3人ぐらい詰め込んでいたのもあった。口脚の長い夏の間、子供達にはたっぷり日光を

浴びさせたいのであろう。これなら向日葵よろしく、一日中太陽を追い掛けることが出来る。

新大陸やアフリカの後発の開拓地では、鉄道を抜かして、当初からハイウェイと航空路を主要な交通路線として使用しているところが多い。しかしここグリーンランドでは、所謂地上交通路と呼べるようなものは、極めて部分的にしか設けられていない。従って、昨今、モンゴルの草原では馬と、モロッコの砂漠では駱駝と、颯爽と競合しつつあるランドローバーやオートバイの類は、この土地では甚だ精彩を欠く。

実際に此処では、多少とも大きな集落間の移動は、時間を惜しむならヘリコプターを、懐を惜しむなら船を使う。その船も、揺れれば船体がギンギンと鳴るような木造船がいく。軽快でカラフルなプラスチック製のボートは、恰好はよくても、氷山に当たればすぐに穴があく。だが木ならば、擦れても、悲鳴を挙げながらも適当に撓んでくれる。若し一人か二人で乗るのなら、あざらしの皮を張ってタールをたっぷり塗ったカヤックが、氷山を縫って進むのには更にいく。

ヘリポートは、極く簡単なものが、たいていの集落の小高い丘の上に設けられている。多分バスターミナルと同じような感覚で。

しかしこれ等は夏の間の話であって、冬ともなれば、伝統的な犬橇や新鋭のスノーモービルへの依存度が、ぐっと高まるのであろう。

今、グリーンランドは夏。可憐な花々の咲き乱れる傍で乳母車に出会った時、一瞬誰もが、もう一度赤ちゃんに戻ってみたいと願うに違いない。

何年前か前、リオデジャネイロはコパカバーナの海岸で、自動車の無謀運転や違法駐車に抗議して、乳母車を連ねたデモが催されたことがあった。

しかし此処では、花々の上を渡るかぐわしい風が、優しく、柔らかく、乳母車を包んでいる。静かにゆったりと時間が流れて行く極北のこの地。今、乗物は……そう、乳母車がいい！